

顕微鏡を利用した低侵襲な根面被覆術 Minimally-invasive root coverage with microscope

望月デンタルクリニック
望月一彦
Mochizuki Dental Clinic
Kazuhiko Mochizuki



「緒言」

歯肉退縮部への改善に根面被覆術は大変有効な処置であり、1950年代から現在まで個体の条件と主にフラップの取り扱いにより様々な術式が紹介されている。理想的な根面被覆は術後に瘢痕、壊死が生じず退縮前の生理的な辺縁歯肉形態に戻ることであるが、これを全て満たすためには現在の根面被覆術にはもう少し改良の余地がありそうである。

山梨県開業の秋山勝彦先生はEnvelope Techniqueを応用し、今までの問題点を克服したオリジナルの術式「Kangaroo Technique」を考案された。今回、この術式で歯肉退縮部に根面被覆を行い、その効果について報告させていただく

「方法」

この術式は、辺縁歯肉にEnvelopeを形成し口蓋から採取した上皮下結合組織を挿入して根面の被覆を図るものであり、全ての処置は繊細なため顕微鏡を用いて行われる。

術式の概略は以下の通りである。

- ①歯間乳頭の退縮を防ぎ、周囲からの血液供給を最大限得るために垂直・水平切開は入れず部分層弁にてEnvelopeを形成する。この際、Envelopeの形成は移植片が挿入されることにより生じる内圧で根面が被覆されるように形成し過剰には行わない。さらに、辺縁歯肉の内縁上皮を切開・反転することによりフラップ内面から移植片は高い血液供給を得ることができる。
- ②歯肉を生理的な形態にするために歯冠部にレジンにて突起を作成し縫合の足場にする。
- ③口蓋より上皮下結合組織を採取しEnvelope内に挿入、将来歯肉縁の頂点となる位置に一糸で縫合する。
- ④移植した歯肉を理想的な方向へ引き寄せるためEnvelopeから歯冠部のレジンの突起に縫合糸を引っ掛ける。
- ⑤移植片がEnvelope内より出ないようにフロアブルレジンにて固定を行う。

「結果」

術後の辺縁歯肉形態は生理的な形態が回復され歯間乳頭の退縮・瘢痕形成は認められなかった。また、拡大視野下で上皮下結合組織を採取し、緊密に縫合しているため供給側の創部に裂開は起こりにくく結果的に治癒期間の短縮につながり術後疼痛は極めて少ない状態であった。処置時間は切開・縫合が少ないため比較的短時間に行われた。

「結果」

Kangaroo Techniqueは垂直・水平切開を一切行わず、薄い歯肉に穿孔しないよう **Envelope**を形成し、移植片への血液供給を最大限得られる工夫がされているため移植片の壊死が起きにくいようである。そのため従来のように収縮を補償するような大きな移植片を必要とせず生体に対して非常に低侵襲な処置が行える。**Envelope**内の内圧を高めるように形成されているため上皮のダウングロースが起きにくくなっており術後の癒痕形成を抑えているようである。**Kangaroo Technique**は顕微鏡を利用することにより拡大視野下で組織に繊細な処置が行えることにより良い結果が出せる有効な術式であると思われる。今後、顕微鏡には従来技術的に難しいとされていた処置を低侵襲で高い効果が得られる術式に変えていく可能性を秘めていると考える。